

研究計画・目的

20世紀前半に活躍し「失われた世代」に属するアメリカ作家ウィリアム・フォークナー、F・スコット・フィッツジェラルド、アーネスト・ヘミングウェイ、およびその周辺の作家たちを研究する。文学テキストの精読にもとづく土地・文化と作品の関係性など実証的な研究も行っていく。なかでもアメリカモダニズム期の「南部」作家フォークナーの研究を中心に据え、フォークナーが1920年代から1940年代前半まで書きつづけた作品群を、近代のもたらしたアメリカ南部人の思考と慣習への影響という切り口から論じていく。近代やジェンダーの視座から、フォークナーやフィッツジェラルドなどのアメリカ文学と、川端康成や村上春樹などの日本文学との比較文学文化論を執筆する。大きくとらえれば、受け入れ機関のボストン大学の図書館を日々活用し、アメリカの研究者との交流、セミナーや学会への出席、現地調査などをおして、これまでの私の研究の視点や考察を今一度相対化すること、また、新鮮な眼で作品や先行研究を読み直し、新たな資料を発掘し新しい解釈を施しながら、より深くより立体的なアメリカ文学研究、比較文学研究を行うことを目的とした。

研究活動

ボストン大学では、図書館を利用し、資料収集、作品読解、作品解釈、論点の洗い出し、アイデアのまとめ、先行研究の整理、論文の構想、論文執筆を行った。図書館では、個室を利用し集中して作品や研究資料を読み込み、また、自宅アパートからもオンラインで図書館にアクセスし同じような環境をつくりながら研究をすすめていった。とくに力を入れたのは、フォークナーの小説研究（『響きと怒り』、『八月の光』、エッセイや短篇小説など）であり、近代と家族という視点から論文執筆の準備と執筆を行った。ヘミングウェイ（『日はまた昇る』など）、フィッツジェラルド（『夜はやさし』など）、カーソン・マッカーズ（『過客』など）、ウィラ・キャザー（『マイ・アントニーア』など）、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー（『ウォルデン』など）、ネラ・ラーセン（『パッシング』など）、ジェイムズ・ウェルドン・ジョンソン（『元有色人の伝記』）、ラルフ・エリスン（『見えない人間』）といった作家のテキスト読解解釈、論文構想と下書きなどもすすめた。ボストン大学所属のモダニズム文学研究者アニータ・パターソン教授、フォークナー研究者ジョン・マッシューズ教授、両教授との論議（フォークナーやモダニズム文学、日米比較文学文化などについて）、マッシューズ教授のセミナー（モダニズム文学、黒人文学、フォークナー、人種）に出席し、新鮮な視点や解釈に刺激をうけた。日本文学との比較文学研究では、フォークナーと日本で接見した川端康成に注目し、川端の諸作品とフォークナーの諸作品を戦後と冷戦という視点で研究し論文執筆準備と論文執筆を行った。ボストンに2年ほど住みアメリカ文学の影響の色濃い村上春樹の諸作品もアメリカ（ボストン）と近代という視点から読解解釈を進めた。ボストン（近郊）に住んでいたアメリカ作家、たとえば、ソロー、ラルフ・エマソン、ルイザ・オルコットなどのゆかりの場所、および、ボストン（近郊）を作品の舞台にしたナサニエル・ホーソン、マーク・トウェイン、ヘンリー・ジェイムズなどのゆかりの場所を現地で調査した。アメリカの学会には、フォークナー学会やリチャード・ライト研究会に出席し、アメリカでの先端的研究の動向を確認し、自らの研究の方向性を再考した。

研究成果

失われた世代と南部文学をひろく考察し、とくにフォークナーの小説世界における重要な土地であるボストンにおいて、受け入れ機関のボストン大学所属のフォークナー研究者と交流しながら、フォークナーと南部文学をめぐる研究、日本とアメリカの比較文学研究に従事することができた。多くのアメリカ文学作品を読み、論文・研究の着想を得ながら、メモ書き、構想、論文執筆をすすめた。マッカーズの小説「過客」をめぐるのは、資本主義社会をいきるジャーナリストの疎外と孤独について論文執筆をかなり踏み込んだかたちですすめることができた。キャザーの小説『マイ・アントニア』をめぐるのは、テキストの精読とともに、人間の記憶と郷愁の問題をめぐる分析を行い、資料を集め、論文執筆の準備を整えることができた。フォークナーの小説『響きと怒り』については、その第二章がボストンを舞台にしているため、小説の舞台と現地の照らし合わせながら、登場人物の振る舞いと心理をより立体的に把握することができた。小説の登場人物がボストン市内を移動してくる過程を、20世紀初頭の地図や資料を入手し、現地をじっさいに踏査し、人物の言動を歴史的な文脈において再考することが可能になった。また、ボストン大学の豊富な文献資料にあたり、『響きと怒り』の世界が、いかに近代的な資本の流入によって伝統世界が変容し、どのように近代と伝統のはざまで人物たちが矛盾と葛藤を抱えながら揺れ動いているのか、じっさいの歴史と文化を調査し、これまであまり注目されてこなかった視座から、分析を施すことができたと考えている。本作品については、全体として各章の論点をさらに深く掘り下げて、論文執筆を大きく前進させることができた。フォークナーと川端の比較研究については、川端が言葉にはしなかったフォークナーの印象——文学的主題、戦後文学、文学と政治の関係性などをめぐる印象——を考察し、フォークナーの作品と比較しつつ、川端の諸作品をアメリカという近代の触手あるいは占領国という観点から分析し、主として伝統と近代の分裂、男女関係、家族に焦点をあてながら、戦後の悲しみと美しさをめぐるの両作家の文学的離反と共鳴を論じた。フォークナーが南部作家として日本の戦後空間に残した個人的な声と祈り、川端が伝統と近代のはざまでもとらえた、アメリカの陰翳と侵食、敗戦をめぐる過去と現実の揺らぎにも光を投じることができた。フォークナーと川端の静かな対話、あるいは、フォークナーの日本訪問を起点とした両者のハイブリッドな文学的開花と結晶を、世界文学のフィールドで捉える論文を執筆した。

今後の展望

上記の研究成果で述べたように、執筆の準備をととのえた、執筆に入った、執筆を進めている論文を、丁寧に書き直しながら、順次、論文として学術雑誌で発表したいと考えている。フォークナーと川端に関して、また、失われた世代の作家、南部作家の論文についても、学会発表をしながら、活字化を目指していく。ボストンでの研究成果を活かして、やがてフォークナー、とりわけ『響きと怒り』を中心にした研究をまとめたかたちで発表したいと思っている。中長期的には、アメリカ文学、とくにフォークナーを中心としたモダニズム文学について、近代と人間の関係性をめぐる広範なしかし丁寧な研究を進めていき、その成果を発表したいと思っている。それと同時に、今回のアメリカ体験をとおして、日米文学比較文化、日米関係史への興味関心がより深まったため、ペリー来航からはじまった日米文化交流を、日米の文学者を中心に、したがって、かれらが書き残した散文（とくに小説と日記）の精読と解釈を中心に据

えて分析・考察を進め、アメリカの日本に対する幻想、日本のアメリカに対する幻想、それら幻想の交錯と、歴史的現実を前にした文学者の思念と思想を読み解き、しかるべき時期にその研究の成果を発表する予定である。

教育への効果

明治大学で担当予定の文学系科目に、アメリカでの研究活動、研究成果を有機的に効果的に結び付けていこうと思う。アメリカで個人的に読み進めた小説、セミナーの課題図書であった小説などを積極的に授業でとりあげて、文学作品（英語）の読み方を丁寧に説明しながら、アメリカで学んだ視点や解釈を紹介し、私自身で考えを深めた論点を伝えていき、学生が文学をとおして獲得しうる人間と文化、人間と歴史を深く理解することの一助となりたいと考えている。写真や映像も紹介し、言語芸術のさらなる可能性をともに考えたい。アメリカにおいて私自身、貧富の格差、政治的分断をはじめとする米国社会に内在する不幸や悲しみを感じ、また、それぞれの言動や出来事にたいする反応にみられる正義や自由といった理念をめぐる多様な価値観や解釈に触れ、実生活においても文学作品においても自らの考えを相対化する機会が多々あった。異国の土壌で描かれた文学の世界、日本とは異なる文化と歴史を生きる群像を読み解くことで、価値観の相対化の契機を獲得できるよう、また、その契機が一過性に終わらずに、文学テキストを粘り強く読んでいく時間と空間のなかで持続性を保ちうるよう、その方途をさぐりあてたい。文学・文化研究をとおして、学生がより真摯に異文化をみつめながら他者を理解し、ひるがえって、より深く自己を見つめなおし、自らが歩いていく道、そこに横たわる歴史的文化的意義への理解を深めることができるよう、努めていきたい。アメリカでの地道な研究の成果を授業に還元し、学生との対話を重ねながら前進していきたいと考えている。

最後にこのような貴重な在外研究の期間をたまわり、多くの方々にお世話になりましたこと、心より深く御礼申し上げます。